

断言した。

そのために部落から追放される結果となつたが、そんな事に驚いてはいられなかつた。

昭和 30 年に餌付けを志し、34 年の 12 月に成功。以来苦しい生活の中から私費を投じて餌を購入し続け今日に至つたのである。寒風の中に立ち、海岸をさまよい歩き、馬鹿者よ、狂者と罵しられつつ。

38 年に I C B P の加盟国會議が日本で開かれた折りに、小湊の白鳥を見る事を希望された方々もおられたとか、しかし、時間の関係もあり釧路のツルに負けた。

私が餌付けを志した昭和 30 年当時、浅所小学校の当時の齊藤校長先生が私とともに白鳥保護に専心されて観察班を編成した。現在の観察班の前身であり、創始者の功績は大であるのに、今は誰もそのことを口にする者はない。甚だ遺憾である。

30 年頃から 34・5 年頃まで、私の記録が浅所小学校の観察班に行っているが、その後は独自で行なつてゐる。

一口に 30 年といつても長いものであった。しかし、健在である限り、保護観察を今後も続けるであろう。

## 強 鞭 さ の 証 明 ある白鳥家族の軌跡

本 田 清

今川文曉師が、私に書き与えてくださつたことばに「魚に非ざれば魚の心は知らず、鳥に非ざれば鳥の跡を尋ねがたし。」というのである。

過去 20 年間、あくこともなく白鳥を追い求めてきた私も、魚の心を理解するなどということは論外としても、白鳥の日常的な行動さえ実際にはなかなかつかみにくくことであつた。

同志相ばかり日本白鳥の会を結成して 5 年、渡来シーズン中、毎月定時定点調査を実施し、全国数十カ所に及ぶ各渡来地での白鳥の様子もある程度はわかつてきたが、これはごく微視的な点と点のなかの概況に過ぎず、最も知りたかった点から点までの行動の実態は、実のところ全くわからなかつた。

しかし、IWRB(国際水禽調査局)方式による白鳥の首輪標識調査が普及してくるにしたがつて全くあからさまに具体的な事実がわかりはじめてきた。

たとえば、これまで白鳥の家族の結束は固いとか、グループごとに行動をともにし、毎年同じ渡来地にやってくるとかいわれていたが、首輪標識調査による過去 3 シーズンのデータから見ると、必ずしも全部がそうではないことがわかつてきた。そこで、ここに二つの白鳥家族の例をあげる。

1974 年 8 月、ソ連の調査隊によってシベリヤのチュコト半島の営巣地で、巣立ち直前に着標された二腹の幼鳥は、10 月はじめに南下したときには、それぞれ親鳥 2 羽、幼鳥 5 羽からなる二つのファミリーであった。

まず、A 群の幼鳥 5 羽のうち 4 羽は、親鳥と思われる成鳥 2 羽とともに 76 年 10 月 25 日クッチャ

湖、同11月7日鳥屋野潟というふうに同一行動をとり、春の北上途上にもウトナイ湖、クッチャロ湖というふうに同一行動が見られた。ところが、残るもう1羽の兄弟鳥である14Cは、どうしたわけか11月7日に伊豆沼に現われ、同9日には阿武隈川というように太平洋を南下していたのである。そして昨春、親鳥とともに帰北していった4羽のうちの1羽の9Cは、今シーズン11月19日忽然と中海(島根県)に現われたのである。

もう一つのB群はどうなったか。B群のうちの1羽ははじめから不明だったが、その他の4羽は親鳥とともにクッチャロ湖、八郎潟、鳥屋野潟というふうにほぼA群と同じような経過をとって南下していた。しかし77年2月に入るとこの兄弟鳥の行動が少しずつ違ってきた。3Cは行方不明、7Cと8Cの2羽は2月下旬、阿賀野川下流で死体となって発見された。もう1羽の13Cは77年1月9日に佐潟に現われ、同3月中は鳥屋野潟の後背地である亀田郷の水田に約200羽のコハクチョウとともにエサをあさっているのが見られた。この13Cは、今シーズンは全くコースを変え、10月30日に太平洋側の屋騎沼(下北半島)に現われ、同12月15日には阿武隈川(福島市内)に現われたのである。

この結果を要約すると、幼鳥が親から独立する「子分れ」の時季は意外に早いこと。兄弟鳥は1年後には、行方不明を含め60%が淘汰される。前シーズンと同じコースで渡来するものは10%。との40%はすべて別のコースで南下するということである。

このことは、野生の白鳥の生きざまとしての、一面の強靭さを証明しているように思う。

## お尋ねします? 「コハクチョウ」という名について

大森常三郎

日本名「コハクチョウ」というものゝ文献・資料をみているうちに、いろんな事、理解しがたいことが含まれているので、次のことを記しました。

Whistling swan (*C. columbianus*) を亜基種として

*C. C. bewickii* (Yarrell) ..... コーロッパ種?

*C. C. yankowskii* (Alpheraky) ..... アジア種?

*C. C. columbianus* アメリカコハクチョウ

と迄は判ってきたが

また、高野伸二先生はコハクチョウをWhistling Swanとされており、清棲先生の著書には Eastern Bewick's Swanとあり「*C. bewickii jankowskii Alpheraky*」となると混沌としてくる。このWhistling swanは通常アメリカコハクチョウを指しているものと思っている。IWRBの調査カードにもピータースコット卿の「The Swans」の中でも Bewick'sと Whistling を明らかに区別されている。

アラスカの渡り鳥のパンフレット「Alaska's Migratory bird」では Whistling swan (アメリカコハクチョウ) を写真でみることができる。しかし、コハクチョウの欧州種、アジア種になると